

語林類葉

つと

十一

い
三

ホ 2
502
11



語林類葉卷之十一

清々濱臣輯

つゝ部

二言

つぎ ぎつてぬとのおこ

保憲女集詞 あけはるきの葉をつきにうて。

つゝ

竹取 けほか つゝのうみりーさのちねめ つゝあぬこに
つくしめいさをくらむる。



秋つけ

果づく 附

○ 秋つけをくれうにちかき家ゆきなへもはひしほゆ

づゝ 九

源 後合 一帖つ○

果つゝ 表

○ 果つゝあききふふま玉埦の及きつゝいさる人の色

道行 一
黄泉 一

京 一
老 一
家 一
山 一
旅 一

○ 菊元 音 樂

ほけまといをききあきあて○ 吹上 中 きて

あきおれあきつたきけいけい色てまんと

ぬん 思ふ

○ 菊元 音 樂 山家上 老見元

○ 菊元 音 樂 久安る 清 神

○ 菊元 音 樂 清 神 集

○ 菊元 音 樂 山家上 老見元

つむ 女陰のツボト通ス

和名掛

○著聞

つほ 庭除

新六 信多 信多 庭除のまはりに名ふかゝ庭除つほをきく
特賢門院堀河集 庭除のまはりに名ふかゝ庭除つほをきく

○源 桐壺

○古今昔十九 廿四 身貧シクテ壺屋

住○今昔十九 十九 此壺屋ニ入テ壁ヨリ脛ヲ

ト澆テイハハ云ニ随テ這入テ戸ヲ開テ壁ノ

穴ヨリ脛ヲハ○同 同 増来リテ壺屋ヲ開ケレ

ハ○同 廿四 後ノ壺屋ナトニ候ニヤト○同 廿四

身貧シクシテ壺屋住ニテ有ル者有ケリ○

東鑑六被戒北面之壺 鎌倉御所 ○

つほ 端

拾遺雜記 女陰のツボト通ス

○

果つ

道つ 拾遺雜歌 ○ 漢つ 同雜意 ○

三言

つうむ 妾。今俗メシツカヒトニ云フ

竹取 づうむとあそふはつきかづむめの源 若菜 ち
うハ多めさるにつうむゆーまーいふきと○
中勢ト中將トライハリトモニ等ノ上 ○竹取
ノ方ニヲル女房ニトモニ源氏ノ妾ニ ○
おれが才ハ四にうほもほしうそつうむまゝと絶○
同つ福あ つうむはり人をえまに かづ姫のいもをに

あそふ多にあそむる ○ 伊勢物語 = 六十 人共四休
る人あつうまて ○ 同 三 みちちのつうむいふ人
をあいにあそむ ○ 室燈 多系君 知もはうけつうむ
つうむ人あそむ ○

果使

拾遺雜歌 花人あにきつひる人の沙奈の信にほる
るにるもて ○ 大和物語 同 ○ 源 多末表 聖武天皇を
んねつうむ
夫木廿五 平祐季
別 けらせの浦あはれまゝ けらせの浦あはれまゝ
波のついに

氷室、
祭女、
彼、
公、
引介、
芳、
八十進、

○後醍醐天皇三たびおぼけつらむてありはるゝ
とて○新古今雜中後白河院栖龍寺にありて
りて駒曳の川分のほろもきりて定家○拾遺
歌にありて平野繁に男侍多て一時うきうき
はせに能き能き○続世継内宴かきけりてあり
きりてはるゝつらむてはるゝなりけりなり
○古今別後醍醐天皇のつらむてありてあり
なりてはるゝなり○教忠集にありてあり
つらむてありてあり○公忠集に平二年十二月
月かきけりてはるゝなりけりてありてあり○朝忠

集十一月右兵衛尉後親盛かきけりてありてあり
に○文德紀三散位後四位下藤原朝臣岳守康
和五年出為太宰少貳因埃校大唐商人貨物適
得元白詩筆奉上帝世耽悦後後五位上○万九
家人使

つらむ

続詞歎嘆洛月仲胤かきけりてありてあり
にありてありてありてありてありてあり
そときりてありてありてありてあり

後醍醐天皇

○ 続世継

支木廿二
後

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

和名
吐

○
源
横
笛

付
天
色
如
畫

まてつゝねとしきと。

ら

保憲女集

野山也、まのむけ
くさつ、つらふ
てんを、今之に

○ 宇部保 さいうけ
あをつらをと ちぬき ちにくくて ○

糸
元
玉
の
り

名
お
と
つ
お
ま
源
杉
風

むけうちにつけ
あきうほを
なげとち
あちち

ちきふく

和名 枹擇食豆波利

○字鏡

乃豆
登波
支利

○宗元

山麓

つぼみ

未開花

新古

万代春上 後抄

白妙のさくらつぼみをうけてそちの春をわさる

○散木 可考

月詠集 四位法皇

かきつぼみさくらをさくらさくらさくらさくらさくら

○山家集 同

四言

つきうみ

続紙

巻物 河海梅枝 ○ 続紙

江次第

源 梅枝

さくらめつきうみさくらさくらさくらさくらさくら

つぼみ

つぼみ

金意下 羽仲女

さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

○

つきうみ

源 若菜

さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

○ 巴井一向に川印

さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

つきはり

続松

続世継

ちあふせのう

つしまりてきくに火もして

○東鑑世六

口ニ

鎌倉中民居每人用意置続松

若夜討殺害人等出来之取首孰声面々取松明
可奔出之由被觸仰干保々○和名州

つゝるゑ

源 須ナ

千枝つねのそけを多しつゝるゑつゝるゑ

らせりや

○河

つゝるゑいゝきみきの上を彩けをそ

く源氏のちきもるゑを波華にまゝせりや

源 若木

むいゝほゆる人ゝをむつゝるゑなも

らせりや

つゝるゑ

療治

源 若菜

ちゝもやいゝなゝくゝほゆるつゝるゑ

てちもいゝ

○源 女

○司 淳

風

つゝるゑま

○つ保 多同

あかりもいゝつゝるゑま

るきねいゝつゝるゑま

つげ 市丸

讀

寧郡保

後系君

つけぬをきくわてにいふも

0

۲۱۰

涼

揆
粒

走馬きろはやにア
うにいかんぬ。○弄

美 湖 之 〇 孟 志 乃 之 〇 源
上 若 菜
之 〇 之 〇 之 〇 之 〇

解
 へ
 ち
 せ
 ま
 う
 一
 へ
 の
 イ彫
 へ
 リ
 夜
 う
 〇
 同
 柏
 木
 つ

三
 女
 へ
 リ
 〇
 同
 室
 木
 心
 の
 産

の
ア
サ
ハ
ニ
チ
ノ
モ
ト
一
ノ
ミ
大
云
○

つらち

土針

萬七
卅三丁

三月廿二日
士針

○和名抄
王孫

徑信々冊集

つひ

千、
ム
シ、
ム

林葉又

あめちしあめとのうきうきいふまふまふ
うきうき

つるし、鴨頭草

枕冊子 みるにあらぬとゆきむのうらに ひやうき

長中御言加訓 標女御帖五君宮
あめりく あめりく けうくつ あけく

散木

○小大君集 長 家系のあめりくしあまき

○さつ保 印さつ保下 うきあめりく あけく

にきま あけく 後俗あまき

鴨頭草 鴨
踏草ノ誤

つるし

拾遺雜秋○順集同○紫花 あめりく

○源 常 いとありき あめりく

○花 京中名跡記 鉤殿院号六条院光孝天皇の

御所六条東洞院にあり あめりく

の鉤殿六条京極也各別の所也○又引宇津保

祭使可考○

つるし 鶴脛 ○スリタカリカ、ケタルヲ云鶴ノ足

うき保 あめりく きん あめりく

しらせ あめりく 金葉連

つゝ
あ
契云トリカヤ

狭衣一
下八
 心にほろせむ
 つくも
 おも
 元々
 〇

つゝ

ツタリ枝

榮花
世月
六宴

茶元 月宴 廿六 ちのめつくろをうゑ。○金葉 雑下 揺
めつくろを。○竹取 つくろをえさにつけて。○伊勢 お
語 うゑめ つくろにきづをつけて。○竹取 筥に入てお
の枝につけて。○うゑ保 吹上 中 ちんめ枝につくろをつけ
て。ちんめ枝ありて。ささのねを産多め つくろをえ。○

同
上 国
漢

之山ふきめつる花につけてる

五十

玉 多し 有り つくもの 折ち け 妙哉 又きと ぬふりし

夫木十四信亥

色てぬき
ゆきみ華あつる
花いづめ
ととふ

新六同

○

つしあき

うーむーあきむほ。

つらな
九折

新六山さし紅家

い星 くらをうけ山はるさたかみそくをわき

六帖寺

さくねるち咲の山はるつらをうけくみえてもくをわき

夫木苗 山寺島 為相

つらをうけくみえてのち咲の山はるつらをうけくみえて

○

つらをうけ

くらをうけ 祭使

おきつらをうけくみえてさいさいわき君れも

いまはくれ 源

若菜

つらをうけくみえて

柏木ヲニ 〇

同 ち原

かみんをうけくみえてつらをうけくみえて

同 ち原

〇 同 ち原

いけきふとつらをうけくみえて

くらをうけくみえて

いけきふとつらをうけくみえて〇土流日

記日とい風をうけくみえてつらをうけくみえて〇今昔

廿八、後日夕元キノ言ヤト云テ此ヲハタク

トス。東鑑十六セ七皆莫不彈指。〇

つらをうけ

思ひ日記 いちをうけくみえてつらをうけくみえて〇

つらをうけ

中務日記 いちをうけくみえてつらをうけくみえて〇

月夜にさへ

竹取月のふちみ人へ。袂衣一はたのふちみ人
しいうてうい

ついでめうい

和名廿

○十六夜日記まな

月(うききもち)にふちみ人へ

猿人の命 送るふちみ人へ。ふちみ人へ。ふちみ人へ

夫木十三

ついでめうい

源 うちみ人へ

うちみ人へ。ふちみ人へ。ふちみ人へ。ふちみ人へ

うききもちにふちみ人へ。ふちみ人へ。ふちみ人へ。ふちみ人へ

袂衣一下。ふちみ人へ。ふちみ人へ。ふちみ人へ。ふちみ人へ

うききもち。長恨奇傳顧左右前後粉色

如土

ついでめうい

源 若菜

ついでめうい。ふちみ人へ。ふちみ人へ。ふちみ人へ。ふちみ人へ

つぼきをいそぐ。女のつぼき。○拾遺

雜春
五
陽入
陽入
つ
ほ
さ
る
て
は
ら
女
も

の〇拾遺秋
念ふ山さへに
つらきそくそくも

江次并二

三

六帖

新六雜草

夫木
廿三
池

十一

しんしん

三

万七
ふ
も
月
読
壯
士
○

つるめまい

伊
特
加
三

ツクマノ 數
ツクマノ 神

あまのつゆのそとせけんつぎのあまのつゆ

○拾遺雜記初句
いふ一かも

於遠近

遠くへ
かゝる
いそぐに
ゆく
神の
ついで
あま
むすめ
に
たまを
つぎ

管方

六帖

2

続詞元 藤分 弘輔木 教長末

あきふくみさちをいさふつはる神のまづけ

後拾雅四 多系源

おほつるつまの神をいさふつはる神のまづけ

弘秀集

まづつはる神にいさふつはる神のまづけ

○ 続詞元 藤分 弘輔木 教長末

つるにあわしむ

凡ニ藍澤。イミシキキワサニ衣澤ル

拾玉四 四十

そまふいさつめにあわしむきふのまづけ

○

八言

つるにあわしむ

大略ノ説

落書 露頭序

つるにあわしむ説。大鏡 あわしむのまづけ

いさふつはる神にいさふつはる神のまづけ

つるにあわしむ

後拾春上 つるにあわしむ

つるにあわしむ。続世継 鳥羽脚

つるにあわしむ。九ツ

○ 源 爲基 つるにあわしむ。中略

之十せみをいさふつはる神のまづけ

に。源 御法 紫上。源 権本 まいあふつはる神のまづけ

きこゆり イクトット ○ 糸元 きんぎょ 定子 五 ○ 拾
 枚廿 八卦部 厄年 十三 廿五 廿七 四十九 ○ 大鏡序 ○
 冥樞十八

つかりのかつ

拾遺身外上 四才 ○

つるの衣

百七

○ 続世継 くせけい のけさ つるの衣の王の四位の色あて

もく人の四位と王の五位とに黒緋をき

十二言

つきのあき 小説書 曉下回 介解 にあき

糸元 巻末 あき あき つきのあきにき ○ 落

らほ 巻末 二の巻あきあきとくもあきへうあきあき

○ 授中納言 いーやめい 姫君末 三こといふ笑てうけあき

三、二の巻にあき ○

十八言

つらきみんちあうきあるほと

竹取

ての部

一言

ての書

漢書郊祀志天子識典手注師古云手謂所書手

跡○字が保もそのまゝてなすもふなすも男の

も女もふいふいふの源梅枝おもてふいふ

ふいふふいふふいふふいふふいふふいふ

○王元論衡十二程我篇文吏知則筆墨手習云

○大鏡三ふみあそ日本一のけふもふいふいふ

ふいふふいふふいふふいふふいふふいふ

トイフヲ
テフト
ツカヒ
シテ

竹取
くさ
き
た
め
る
人
の
ま
い
り

て
は
辛
間

六帖

八重色いふもの酒のてふめ候いう候
て海に君をさへ

掘百九月冬

師祖

支木世三

卷三

八重巻の
 七巻の
 六巻の
 五巻の
 四巻の
 三巻の
 二巻の
 一巻の

出う
居い

金葉雜上
公言今もとにあらう
色うきにならう

里邊
 出
 坊に
 おき、
 色々
 なる
 小舟
 を
 弄
 て
 三
 三
 〇
 源
 三建

あうしよ
はてな
を巴
外様
もき
○

三 九

五

水鏡 敏達
太子 孝武の事のあらはえ侍をすゝと

多岐 時辰 門をへ 欠多 由川 五七 きく 人 多

ちあまふき○今昔十六
条廿八
此ハ何カセ・ニト

為トイハ氏田斐ナクテ死ニ至レハ手ヲ打テ

注許志テ。○大鏡一 花山 ぶをむきくさく

とうりく。玉のり けむをうちてあつちふに

あそむー 師 三余カ右近ヲ 見付テ云ナリ。○

てしと 調度

拾遺雜志はゆきしものなをさうく けりき

○今昔廿六 廿七 利にカ共ニモ調度カケ一人

舎人男一人リ有ケル。○

てかく 千ニラミカタヲミラヲミフル

源 柏木 んちせんうけあつにききしてさせい初と

ふのうき せえく。○今昔廿八 廿九 走レクトキ様テ

遣ッ。○

てうむ 千 詞

朝夕にけむをふくし 多ふうきにけりし山をの里

○

てさく 千 掉

嚴嶋詣記 多のあけにちとちけるを舟のあけち多掉はるけり

○

てきり てるの訛う。今俗テタレト云

長明無名上 後徳大寺のあゝいたちけきとあゝそ
あゝせーかし

てづ 俗ニツバウミジカシナド云ト同シクツバマルノ
ツバト同語ニテ音便ニテアルヒハ上或ハ下スハ
上下トモニモニゴル也云フトコロコマデ行トバカ
ス意ナリヲハ様也

紫日記 いちとろをきこきらあーけけいにて
づにあきゆーゆーき。○ 続世継 ミミヤカ 日本

やゝてけいけい四ノ○新猿樂記云織紐裁縫也
以手筒也。○ 紫苑 ミミヤカ
たまけりこきり○ あんてけい園白の人

てきり 紫苑 音 五 てきりてあゝまけぬとあゝせき
るに○同 御裳着 けけい海陣とけきあゝそて
てきりていせきり○ 今イフキヲヒカ
レテ行玉フニマ○

てきり 手振

おほくふも
きふも

1

3

源
梅
枝

テ
勤
ク
○
ノ
三
訖
力
○

空穗

廿九

梅窓筆記云小解除手板ト云フ日次記ニアル
ハ假初ニハラヒヲフルナリハ左經記長
元九年五月十九日中畧以御骨許一升奉納茶碗
壺畢園白相府以下歸路云々於鴨河乍車手板
只以草人形又老縁華作法記云民部卿記云人
不備祭物々歸取近辺草カキワケテ懷之渡河水之取
面ヲ以草カキ填テ流之是名手板弄畢白杖同
弄畢或記云於水使所々解除以人形換之弄川
畢○

長點
短點
合點

てんあひ

合點

十六夜日記十八首にてんあひめも○玉勝間十斤
点諸点家隆々カキ多々物にミエ多々○東鑑四
十六正嘉二年四月十八日武家申下供奉人御
點被遣越後守之許牧野太郎兵衛為中使云々
右御點布衣左長點隨兵短點帶劔云々哥レハ
アコトハ同義也○同五十一十二首和歌
為合點○

田樂

批

一

数千万羽ノ啄木鳥ト成テ堂舎ヲツキ亡カ
ニトシケルニ太子ハ鷹ト変シテカレヲ降伏
シ給ケリサレハ今ノ世マテモ天王寺ニハ啄
木鳥ノ来ルヲサシトイヘリ

寺をうみ

詞苑冬 素山に百寺をわたりてちりけりもまにを免る 有雅
素山にも山ありけりちりけりもまにを免る 有雅
後環難一 法皇寺ありけりちりけりもまにを免る 素性
ふのちりけりちりけりもまにを免る 素性
○袖中十八石山の寺ありけりちりけりもまにを免る 通照寺に訪て
○素山 伊賀 ちりけりもまにを免る 素山

源 常木

源 常木 いふふ人の為にちりけりもまにを免る 〇同 あつむ
ちりけりもまにを免る 〇同 あつむ
ちりけりもまにを免る 〇同 あつむ

源 常木

源 常木 いふふ人の為にちりけりもまにを免る 〇同 あつむ
ちりけりもまにを免る 〇同 あつむ
ちりけりもまにを免る 〇同 あつむ
手ヲ和声ヲ奉テ関白殿ヲ呪詛シケル 〇今昔

菊元 月宴 廿六 菊元につけても夕々き 〇 同 夕々き 廿六

蝶々 〇

ていつ 批 點ノ 菊元

源若菜 人にてん 〇

ナ 言

ふろ 足 〇

竹取 又ふろ 〇

あて まい 〇

ていつ 〇

弁内侍日記 今出川殿 〇

に 〇

て 〇

か 〇

代 〇

も 〇

弁内侍

〇

八言

帳にまひりく

糸花うゝふけてけをさあまひしは懐のそ
もにむきしけささくはるき
ちうをまてささくをの海明とちうまきささく
ふにささくはるきささくはるきささくはるき
うちけけささくはるきささくはるきささくはるき

ふをささくはるき

竹取ふをささくはるきささくはるきささくはるき
ふをささくはるきささくはるきささくはるき
はるきささくはるきささくはるきささくはるき
ふをささくはるきささくはるきささくはるき
ふをささくはるきささくはるきささくはるき

九言

天子ささくはるき

空穂 卯本 初秋 上 波 天子ささくはるき

とくも

曾丹集九月上

五代秋下同

○

とくも

草 辭

拾遺雜春

賀朝法師

返

とくも

源 廿 女

けとみのとくも ○ 源注拾遺委注 ○ 玉の海

○

とくも

とくも

新六

信実

○

拾遺集上

拾遺集外下 廿四

後拾遺書三
祭主肺親

家之

祭主 南親

卷之四

神中三十一
あき川の清く○著
同蹴鞠義我一
期に於

一色ひて○
 十 東
 ル 方
 へ ノ
 ミ 博
 音
 ○

遠眼

滂松中納言

雪と云ふ梅と山と所更へ

風葉集卷之八

上卷

兼
師
集

多
三
み
つ
く
し
と
多
く
人
の
上
を
あ
る
ま
に
あ
る

支本廿七

[illegible]

久安百

親隆

安百其 親隆

○東遊譜
 於保比利
 オホヒレヤラヒレノヤマ

ハ
ヤ
ヨ
リ
フ
コ
ワ
ヨ
リ
フ
コ
ワ
ヤ
マ
ハ
ヨ
フ
ヤ
シ

ヤ
ト
ホ
メ
ハ
ア
レ
ト
○
縣
居
云
遠
妻
也
○
ニ
按
遠
自

○

ちの 後入ありき。

さきあき

五代神祇

上巳後

中御定規

さきあきのさきあき

○

ときあき

時ナク

清時集

ときあき

さきせん 得選

枕冊子十廿七

秘抄云凡於車寄乗車女房近代例也況得選不

可然事也行幸走内侍同車取曉之近代事也。

中務内侍日記髪あけのさきせんはけさきせん車の

さきせんをせて。江次第抄云得選者御厨子所女

官也於采女中選其人故得此名。○禁秘抄云得

選三人髪上采女兼之云々。

さきせん

林葉六

いはい

○
 今
 俗
 年
 ノ
 始
 ニ
 ニ
 三

○ 徳河
若ヨ
ニリ
御万
万歳
歳ト
トテ
ハク
云ル
そ者
トノ

年 越

سنة ١٢٠٠

山家上 勢波に 一 〇 同下 四十 清々

木十六歳
 言言

支木十八歲
信云

[illegible]

0

平明
年次

萬代
萬

八百番
三々
神
水
三
三
三
三
三
三

とめ人

源 領ノ
かきとてしきよみぬま○

飛トビ
梅ウメ

拙石集五安寧寺の茂梅を

古
說
稻
ヲ
云
レ

200

上
文
ニ
係
時
試
樂
○
萬
花
日
々
々

紀方集の多し金山を
哺親

和山先生

一條院時條時奈に時時ふ事をとる

五

ふきの花
つぼき
神子

ついでに、
ふたつを
うめ花

権大御方 隆房
ひきまにむき
ねあきふし

稚下浚冷泉院御取大嘗會主墨方御屏

國を金山にあつては人衆の多きところなり

三

てきく山にふゆあけきふふふふ

糸主
主
糸主
糸主

糸主
主
糸主
糸主

色々根
さくらんぼの
彩にひまわりをみこ

集
人

集
人

いふに袖をきても草のうねり

志須夜乃小管
本
志川夜乃已須介

良波比牟夜已須奴於比牟夜於比

未
安女奈留比
波利与利已
夜比波

久伫止見久尤毛知天○愚樂世之

ハ稻をいづる。○古本風俗哥 荒田 安良太仁
於不畱止見久佐乃波奈天仁川見礼天見也戸
末井良年奈加川太衣。○神遊考 志都夜乃小
菅注可考。○

こしき 竹

丈夫三仲西

類政集

大木新六信実

あきさるゝ垂風にまじりて花あかばねなすくもくもく
為忠百そ

こしき

後拾秋上らんこしき
後落

くまもほろをなもちも。○

こしき 取次

清慎公集 ころしき
こしき

そーろろ。○

こしき トウニヤス

師光集

賢友を保

神山の
之
秘
つ
さ
か
き
を
さ
う
さ
う
て
忍
々
い
ふ
ま
そ
妖
か
う
ま

源 繪
あはれいふもうらやまてあはれいふも

○ 同
伊 治
大將
君
如
く
そ
う
ち
て
つ
う
く
あ
つ
き
ひ

〇

十行

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

十に色は之に
色は之に

夫木廿七

馬の如く走る如く走る

○ 丈木九注云けふい祭の四あききへふちの的めり

を事方懐に
つゝも
をて
心
兼
繩
中
將
祭

ヤ式
レ郊
ルカ
十ヨ
リミ
テ
○
江次
春
日
祭
世
云
上
卿
相
具

神馬十列

支木廿七 為家

千五拾兩の馬

源

ちやえゝむろり○花鳥十つゝゝ素遊の舞人十人馬

にのて装束ハ青褶と云ふをきて神社へ行幸関

白々々々々々
春
日
詣
外
に
召
買
し
て
社
所
あ
て
求
子
の

とほいてその後馬場にて馬をたづねたりと云

九、近衛の官人等を、八幡原の祭りに

教上の高岩舞人多し源氏君住吉等てし樂人

こねいふの 未詳

さきねき 同 ときけ時 後鳥羽 ねいふの 百

けふのさき 定家々 四十さきさき 日記

い

よのか人

源 権 ねいふの ねいふの 清浦尚蓮令

記 次 ねいふの ねいふの ねいふの ねいふの

ねいふの ねいふの ねいふの ねいふの

ねいふの ねいふの ねいふの ねいふの

トノ井衣
トノ井モノ
トノ井スカタ
長宿直
大宿直

いふの ねいふの ねいふの ねいふの

○金葉雜上前 ねいふの ねいふの ねいふの

ねいふの ねいふの ねいふの ねいふの

国ヨリ長宿直ト云フ 當リテ郡司ノ子ナル

若キ男ノ上リタリケルカ 頼政集大町守護

ねいふの ねいふの ねいふの ねいふの

ねいふの ねいふの ねいふの ねいふの

ねいふの ねいふの ねいふの ねいふの

人志きぬ ねいふの ねいふの ねいふの

○枕冊子 ねいふの ねいふの ねいふの

萬代春上
志見

A circular stamp or seal, possibly a library or collection mark, located at the bottom center of the page. It contains some illegible text or a logo.

山家集下

噴
急
井

卷八

後

拾玉集
二

福子

○

文選向秀思曰賦序鄰人有吹笛者笙聲寥亮

掘百懷回

2

子
雜
下

器

子

何

BN

U3

42

28

13

11

二

22

2

○新郎秋夜梁鷄栖而遲唱笛吹向子期之隣

六百番

未詳

續詞苑戲咲

十卷一
成通

了然

24

○
源
莖

河

○ 曾 丹 集 長

まはかきをわい免るか

新古集

掘百畝
國信

とろろあう

万代神祇

秉和大常會修紀方美濃國風俗奇

人々

いふにちいさな
うしろのあかりに
あふく色あはれ

金葉文紀万の朝田の里のふたつ敷光

敷光

くちけきとあつにあはる
あはるにきき

續千四百六十六

ふ君め千年のうけをうみ山豊めあけにみちる色ありさ

A circular stamp or mark, possibly a seal or a decorative element, located at the bottom center of the page.

とみて

万代春下

神まりを枝にうけても寝るの氣

拾遺神方

源をと決

神樂譜

清浦集

二萬全集

夫木二

あ

神

五代神

壬二

方代神

を

拾玉四

154

○

3

十
禪
師

拾玉西

高

0

3

○

とものみさ人

弟亮 とも亮

もほり

後拾雜五

統後携雜上

とくまのよ

後拾雜 能因

あはれなるにあらはれぬ

○ トヨラレハカリノトヨラレヨトイフ

契説 並誤

八言

ときをほりて 臨終

弟亮 三十七 ときをほりてあはれなる

とくまのよ 褓帳役

三代紀一天安二年十一月十一日戌辰無位坂
子女王皇子女王並授後四位下是褓御帳之女
王也凡天皇即位之日擇王氏女有容儀者二人
充褓御帳之職因而賜爵他皆效此○玉賀 今

上御即位の夜大納言三位とあけしめて上階

して侍時 入道太政大臣

○中務日記さうあけのうゝ泊るにほむき

○讃岐日記大納言のあけしめてあけしめて

○

十二言

山家下無常

千載

○

此言三言之条
二入

源梅枝

源梅枝

○花鳥あけしめてあけしめて

○

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in dark ink on aged, slightly yellowed paper. The handwriting is fluid and characteristic of the 18th or 19th century. The text is arranged in several lines, with some words appearing to be underlined or emphasized. The overall tone of the writing is formal yet personal.

